

建築家 村山 雄一

ウィーンの街での美しさ

そもそも日本の民家に「窓」は存在したのだろうか。柱と梁の構造体である日本の伝統的住宅には、柱と柱の間に「木や紙の動く壁」とでもいう

ような雨戸や障子が立っていたが、現代ではガラス戸に変わったというだけではないのか。石を積み上げて作る組積造の西欧の家にあるような、壁面をうがって作る「窓」ではなかった。

垂直の柱と水平の梁に囲まれた「日本の窓」は当然四角であり、大きさも畳の寸法を基準にしていた。こういう常識の中では、普通の住宅の中にアーチ型の窓が生まれることはなく、今日でもこの「柱と柱の間を窓」とする考えが支配的である。

四方に柱を立てて場を規定することから家を建てていく方法と、四方を

空間に動きを

④

壁で囲んで得られる閉ざされた領域を集めて家を築いていく方法とでは、開口部の作り方にも根本的な違いが生じてくる。

壁で囲んで得られる閉ざされた領域を集めて家を築いていく方法とでは、開口部の作り方にも根本的な違いが生じてくる。

ウィーンの遊学していたころ、いつもはがきの大きさに折り畳んだ画用

紙をポケットに入れて持ち歩き、市電を待っている台間にも、ふと出合った街角の美しい建物をスケッチするのが日課だった。

ウィーンの遊学していたころ、いつもはがきの大きさに折り畳んだ画用紙をポケットに入れて持ち歩き、市電を待っている台間にも、ふと出合った街角の美しい建物をスケッチするのが日課だった。

光の音楽を奏でる窓

壁に囲まれた空間は闇のままである。闇の中に身を置いて、壁に注意深く穴を開け、光を導き入れる行為こそが、窓のデザ

インの原点であると思う。ウィーンに遊学していたころ、いつもはがきの大きさに折り畳んだ画用

紙をポケットに入れて持ち歩き、市電を待っている台間にも、ふと出合った街角の美しい建物をスケッチするのが日課だった。

ファサード(建物の正面)は肩をのむほど美しかった。特に印象に残るのが窓である。ルネサンス、バロック、ロココといっ

た時代は、1階の窓の真上に同じ幅の2階の窓があり、それが3階、4階と縦にきれいに並んでいる。時代と共に窓枠の装飾が変わっても、この秩序は歴然とウィーンの街を支配し、未来をも確信しているかのようだった。この時、内部の要求に従って、思い思いの形と大きさの窓が各階についたとしたら、秩序はどうなるのだろうかと思った。



住宅の半地下に設けられた窓



こんな形の窓も出来る

頭の中は音楽のこと、華やかな人々の気分のこと、決して意図したわけではなかったが、出来上がってみるとその窓は、どことなく優しい形をしたハーブのようにも見えてくる。窓も音楽を奏でたかったのかもしれない。